



横浜市立万騎が原中学校 学校だより

桐の花

令和3年

10月19日

校長 中村 雅一

横浜市旭区万騎が原 31 TEL 045-391-5514 FAX 045-391-5537

URL <http://www.edu.city.yokohama.lg.jp/school/jhs/makigahara/index.cfm>

『ウィズコロナ時代の学校』

校長 中村 雅一

10月1日、東京や神奈川など19都道府県に発令されていた緊急事態宣言が解除されました。

今回の第5波のピークだった8月20日前後は毎日2万5000人が感染する状況でしたが、その後、急速に感染者は減少し、9月末には1000人台となっています。現在は、500人前後で、第5波は終息したと言えるでしょう。しかし、なぜ終息したかは明らかではなく、何をすれば感染減につながるのかという点もどこか曖昧なままです。感染が増えている時は感染に関わる膨大なデータが日々発表されますが、流行と抑え込みメカニズムがはっきりと説明できないことが問題です。来たるべく第6波に備えるためにも、科学的な、そして統計に基づいた解明と指標、詳細な検証が急がれます。病気の原因を取り違えば、対策は後手後手に回ってしまいますから。

神戸女学院教授の内田樹さんは、『どうして「あること」が起きて、「そうではないこと」は起きなかったのか。その理由について考えるのは大切なこと』と言っています。歴史の勉強では実際に「起きたこと（事件）」について「それはなぜ起きたか」、その因果関係などを学びますが、「起きてよかったのに起きなかったこと」については学びません。また、歴史上のどんな事件であれ、前もってそれをはじめから予見できたということはほとんどないです。同じことが未来についても言えるわけで、未来は予測がつかないことです。よって、『過去の「(起こってもよかったのに) 起こらなかったこと」について考えていくことは、未来の「起こるかもしれないこと」を予測し備えるためにたいへん有効かつ大切なことだと、内田さんは言っているのです。まだ収束に至らないコロナについても、「ウィズコロナ・ポストコロナ社会はどうあるべきか」を考え、未来を予測していく上でも、第5波の終息の科学的な解明が必要です。

先日、10月4日、本校の部活動再開の様子がテレビ朝日の「報道ステーション」で流れました。横浜市の通常授業と部活動が再開されたことの報道で取材を受けました。その際、校長として思うことも話させてもらいました。以下、実際に話したことにプラスして書き加えた部分もありますが、私、校長のインタビューはカット！でしたので紹介させていただきます。

「大人は、オリンピックもプロ野球、サッカー、大相撲、そして音楽フェスも普通に楽しんでいるのに、どうして自分たち生徒だけが部活を我慢しなければいけないのか、という思いを持ちながら、耐えてきたのではないかと思います（さらに、地域のスポーツ・クラブは活動している所もありますから、その思いはなお更です）。今年の3ヶ月に及ぶ長い休校中は、子どもたちが公園で遊んでいると「無症状で広めている」と非難され、ちょっと前までは、「高齢者を守るために」、今回は、「親世代を守るために」と、学校や子どもたちの教育活動は制限され、我慢を強いられてきました（もちろん、病床がひっ迫していた訳ですから、仕方のない事ではあります）。ですから、部活のできる喜びを味わってほしい、という思いは当然にあります。が、「なぜ、自分たちだけが」という疑問や、上位大会に進む競技のみ、活動が認められた、という「分断」につながりかねない例外など、様々な疑問や矛盾について、考えていくことのできる市民に育ててほしいと思います。そして、そもそも大会とかに関係なく、多くの生徒が「学習の習慣」「運動の習慣」という、これまで積み重ねてきた自分たちの「財産」が崩されてしまった訳で、今日より、一步一步、少しずつ、再び「小さな努力」の積み重ねの始まりです。今日は、そんな再スタートの日なのです。」

また、8日の前期終業式では、テレビ集会で生徒に勉強や運動など、良い習慣を作るために大切なこと、などの話をしました。要点のみ、簡潔に紹介させていただきます。

「新しいチャレンジに必要なことは、「やる理由」。「何のために」という理由。そして、「どんな自分になりたいか」という「願い」。この2つのことを考え、思い描けると、今やるべき毎日の勉強も「習慣化」しやすく、モチベーション、つまり、「やる気」も上がってチャレンジ意欲もアップする。

しかし、すべての人が「将来、何をやりたいか」「どんな自分になりたいか」、はっきりしている訳ではない。むしろ、明確な勉強の目的や将来の方向など、いまだおぼろげでしかない、あるいは全くやりたいことが見つからない、という時、どうしたらいいのか。「勉強の習慣をつけるには」「やりたいことを見つけるには」。その答えは、やはり、「小さく始める」こと。着実に、かつ、長く続く、唯一の方法は「小さく始める」こと。しかも、「すぐに始めること」「今すぐ」「先延ばしはダメ」。「パーフェクトを目指してもダメ」「あまりに壮大な計画や目標もダメ」。それはすぐに困難を感じてしまい、続かないから。そして、続けること。繰り返すこと。「行動は繰り返すほど、簡単になる」、そして「習慣を無意識化すること」。

「やりたいことが見つかる」⇒「やる気が出る」⇒「勉強する」⇒「できるようになる」ではない。
(モチベーションが上がる) (能力がつく)

これでは、「やりたいことが見つかる」まで、「やる気」が出てこないため、動けず「じっと待つ」ということになる。そうではなく、スタート地点は、まず「勉強する」(運動する等の「行動」)。

「勉強する」⇒「できるようになる」⇒「やる気が出る」
⇒「再び、勉強する」⇒「できることが増える」⇒「やりたいことが見つかる」 という流れである。
↑(繰り返されて) ↑(選択肢も増えて)

どんなことでもまずはやってみて、小さいことでいいから「できた」「成功した」という体験を積み重ねていく。失敗しても、また続けていくこと。そうしているうちに、勉強や運動は習慣化され、結果として自分の選択肢(=できること)が増えていく。

こんな公式がある。

(アビリティ & プロンプト)

B=MAP 「行動 = モチベーション & 能力 & きっかけ」

意味としては、行動を決めるのは、モチベーション(やる気)と能力の要素に加えて、「きっかけ」が関係している、ということ。中でも「きっかけ」が大事！ というか、どんなに高い「モチベーションと能力」があっても「きっかけ」がなければ、どんな行動も起こらない。逆に言えば、モチベーションや能力に頼らなくても「きっかけ」さえあれば、行動が始まり、繰り返されて、習慣化される。よって、必要な「きっかけ」を取り入れ、望ましくない「きっかけ」を排除すれば、望まない習慣、悪い習慣をやめることができると考えられる。

たとえば、スマホの時間が長くて、勉強にとりかかれぬ、どうすればスマホにのめり込む習慣をやめられるようになるか。モチベーション、やる気や能力に頼らず、「きっかけ」に着目して考えてみる。ゲームアプリを消す、それが無理なら、スマホを勉強部屋に持っていかないとか。悪い行動を起こす「きっかけ」を断ち切り、良い行動を起こす「きっかけ」を作ることがポイント。

今日もらった連絡票の成績、長期的に見れば、ほんの一時のものであるが、君たちが奮起する「きっかけ」にしてくれればと思う。有意義な長期的な変化を起こすには、願いを叶えるためには、段階的に前進すること。

「巨大なクジラを食べる最善の、一番良い方法は「一度に一口ずつ」口に、一回一回、運ぶこと。
「シンプル、単純なことの継続、それが、「習慣」になり、その習慣こそが行動を変える」ことになる。

以上の話は、「習慣 超大全 (スタンフォード行動デザイン研究所の自分を変える方法)」BJ・フォッグ著を参考にしました (内田司書さんに本校の図書室に入れてもらいますので、興味のある方は読んでみてください)。

終わりに、先日の3学年保護者進路説明会においてもお話をさせていただいたことですが、ウィズコロナ時代の学校についてです。「コロナ禍」の教育活動については、子どもたちの教育の機会を確保していくことが大前提となります。そのため、行政や学校、そして各家庭は、感染リスクと「どう向き合っていくのか」、その都度、「決めていくことにならざるを得ない」のだと考えています。

つまり、教育活動を継続していく以上、感染リスクをゼロにすることはできませんから、行政や学校の感染対策に加えて、個人としてできる対策、個人として負えるリスク(経済面や学習面、精神面等のリスク)はどこまでかを考え、判断して、「参加や活動の在り方を決めていかなざるを得ない」ということです。リスクとは、その人が大切にしている何らかの価値を失う可能性についての話ですから、価値が異なればリスクのとらえ方も異なります。

よって、こうした価値は、その個人が置かれた状況や事情により異なりますので、家庭の状況や事情によっては、「学校に登校せず、お休みする」「行事は欠席する」という判断も場合によってはあるのだと思います。反対に、子供たちの居場所やセーフティネットとしての役割を学校に求めている場合は、そうはいかないです。どのような判断においても、その判断したことによって生じる結果やリスクを、基本的にはセットで、併せて「受け入れていく」ということにならざるを得ません。その結果とは、教育活動への参加の場合は「感染のリスク」であり、不参加の場合は「学習機会や経済面の損失」、さらには、対人関係からの「心理的社会的ストレスの増大」などです。こうしたリスクもセットで行動を決めなければいけないのが、これまでになかったことであり、本当に厳しい、判断の難しいことなんだと思います。このことは、行政や学校にも言えることです。つまり、感染によってどの程度の危害が、どのくらい起きやすいかの推定は科学の問題ですが、社会においてそのリスクをどこまでなら許容できるかは価値の問題で、そのリスク許容の合意形成が行政や学校においても求められているのが現状だからです。

そうである以上、行政や学校は、家庭や個人が「決める」「選択する」にあたっての情報や判断材料を、事前に、丁寧に示されなければならないと考えます。また、どのような選択をするにしても、何らかの大なり小なり「リスク」を負うこととなりますが、そのリスクを出来る限り小さくしていくことも行政や学校に求められることです。たとえ感染したとしても重症化しないよう医療体制を整備していくことは、行政の責任です。また、感染したこと自体に責任はないのであって、間違っても「自己責任」を問うてはいけません。さらに、感染による長期の休校等においては、学習保障は学校がしなければなりません。それは、行政によるネット環境などのインフラの整備とセットです。

今、学校の存在意義は、子供たちが家庭を離れて集団生活を送る中で、知識技能の習得だけでなく、自己肯定感や他者への尊重という態度を育みながら、同時に集団生活に必要な協調性や社会性を身に付け、規律を学ぶことのできるという点にあることが、コロナを通じて改めて認識できたと考えています。

今後も、私たちは自分と異なる価値や意見に対して、安易に批判や反対をするのではなく、その背景にある様々な状況や事情に思いを寄せながら、お互いの判断や決定、選択を尊重し、個人個人が自分自身の意思で「同調圧力」によらないで、物事を選択できる社会となっていくことが求められるのだと思います。それが、「ウィズコロナ時代の学校」に求められることだと思います。

どうぞ、今後もこうした判断や選択に、個別のご事情等があってお困りのことなどありましたら、まずは学校にご相談ください。

交通安全教室を実施しました。

10月6日(水)6校時に、旭区役所地域振興課、旭警察署、旭交通安全協会の方々にご協力いただき、交通安全教室(スケアード・ストレイト)を行いました。

「スケアード・ストレイト」とは、怖い思い、ヒヤッとする体験を通じて啓発効果を高めることをねらいとした教育技法のことで、具体的には、スタントマンによるリアルな交通事故再現を行い、交通事故の衝撃や恐怖を実感させ、交通ルールの必要性について生徒に考える機会を与えるというものです。

今回も、自転車の併進、スマホを見ながらの歩行・自転車の運転、傘さし運転等、様々な場面を想定し、それが原因で起こり得る交通事故を、スタントマンの方に再現していただきました。また、死角や内輪差の再現では、生徒の代表が再現実験に加わり、体験しました。今回の交通安全教室では、

スタントマンが再現を行ったので、事故やヒヤッとする場面に遭っても、すぐに立ち上がり、けが等をすることはありませんでしたが、実際の場面を想像することにより危機感の高まった生徒も多かったのではないかと思います。交通事故の危険性を再認識し、原因についての知識を広げ、日常生活における交通ルールやマナーに対する関心をもち、危険回避の意識を高めてほしいです。

スタントマンが再現を行ったので、事故やヒヤッとする場面に遭っても、すぐに立ち上がり、けが等をすることはありませんでしたが、実際の場面を想像することにより危機感の高まった生徒も多かったのではないかと思います。交通事故の危険性を再認識し、原因についての知識を広げ、日常生活における交通ルールやマナーに対する関心をもち、危険回避の意識を高めてほしいです。

スタントマンが再現を行ったので、事故やヒヤッとする場面に遭っても、すぐに立ち上がり、けが等をすることはありませんでしたが、実際の場面を想像することにより危機感の高まった生徒も多かったのではないかと思います。交通事故の危険性を再認識し、原因についての知識を広げ、日常生活における交通ルールやマナーに対する関心をもち、危険回避の意識を高めてほしいです。

スタントマンが再現を行ったので、事故やヒヤッとする場面に遭っても、すぐに立ち上がり、けが等をすることはありませんでしたが、実際の場面を想像することにより危機感の高まった生徒も多かったのではないかと思います。交通事故の危険性を再認識し、原因についての知識を広げ、日常生活における交通ルールやマナーに対する関心をもち、危険回避の意識を高めてほしいです。

スタントマンが再現を行ったので、事故やヒヤッとする場面に遭っても、すぐに立ち上がり、けが等をすることはありませんでしたが、実際の場面を想像することにより危機感の高まった生徒も多かったのではないかと思います。交通事故の危険性を再認識し、原因についての知識を広げ、日常生活における交通ルールやマナーに対する関心をもち、危険回避の意識を高めてほしいです。

スタントマンが再現を行ったので、事故やヒヤッとする場面に遭っても、すぐに立ち上がり、けが等をすることはありませんでしたが、実際の場面を想像することにより危機感の高まった生徒も多かったのではないかと思います。交通事故の危険性を再認識し、原因についての知識を広げ、日常生活における交通ルールやマナーに対する関心をもち、危険回避の意識を高めてほしいです。



赤い羽根共同募金 街頭募金

10月2日(土)・3日(日)に南万騎が原駅前広場にて、赤い羽根共同募金 街頭募金が行われました。万騎が原中学校からは、4名が参加しました。

コロナ禍の中で、密にならない、羽は手渡ししないなどの感染予防対策をしながらのとても難しい活動になりましたが、意欲的に募金活動を行いました。行きかう人々から募金を頂き、地域の福祉活動に協力することができ、4人とも満足した活動をすることができました。

行きかう人々から募金を頂き、地域の福祉活動に協力することができ、4人とも満足した活動をすることができました。



県大会出場

陸上競技部

男子駅伝(市9位)

女子駅伝(6位)

女子ソフトテニス部

個人の部

学校ホームページに学校運営費(公費)の令和3年度予算編成表を掲載しました。執行計画は、例年と比べ大きな変更は、ありませんが、昨年度同様、特別予算として「新型コロナウイルス感染症予防対策費」として、掲載されている予算編成表とは別に160万円の配当があります。

今年度も効果的で適切な運用に努めてまいります。なお、令和2年度決算報告もホームページに掲載しましたので、併せてご確認ください。

生徒の皆さんも、電気や水、校舎等施設や備品等を大切に使用してください。必要なところに予算をしっかりと活用できるようにご協力をお願いします。

11・12月の予定をお知らせします

※予定ですので、感染の状況等により大幅に変更になる場合もあります。

11月				12月			
日	曜	行事等	昼食	日	曜	行事等	昼食
1	月		○	1	水		○
2	火		○	2	木		○
3	水	文化の日		3	金		○
4	木		○	4	土		
5	金	午前授業	×	5	日		
6	土			6	月	保護者面談	×
7	日			7	火	保護者面談	×
8	月	修学旅行保護者説明会3年	○	8	水	保護者面談	×
9	火		○	9	木	保護者面談	×
10	水		○	10	金	保護者面談	×
11	木		○	11	土		
12	金		○	12	日		
13	土			13	月	3年3校時まで	3年×
14	日			14	火	2年校外学習	2年×
15	月	3年中間テスト（音・技術・保体）	3年 ×	15	水	3年3校時まで	3年×
16	火	中間テスト（美・理・英）	×	16	木		○
17	水	中間テスト（国・社・数）	×	17	金	生徒会選挙演説会	○
18	木		○	18	土		
19	金		○	19	日		
20	土			20	月		3年×
21	日			21	火	修学旅行3年	3年×
22	月	生徒集会	○	22	水	修学旅行3年	3年×
23	火	勤労感謝の日		23	木	修学旅行3年	3年×
24	水		○	24	金		○
25	木		○	25	土	冬季休業（1月6日まで）	
26	金		○	26	日		
27	土			27	月		
28	日			28	火		
29	月		○	29	水		
30	火		○	30	木		
				31	金		

○○●○○○●○○○○●○○○○○●○○○○○○●○○○○○○●○○○○○○●○○○○○○●○○

学校カウンセラー（松葉優香）による相談

10・11月の相談日は

10月22日（金）

11月5日（金）・12日（金）・19日（金）です。

相談予約等は、本校職員または相談室直通電話（391-5891）まで。

○○●○○○●○○○○●○○○○○●○○○○○○●○○○○○○●○○○○○○●○○○○○○●○○